

深川の河岸・問屋

江東区深川江戸資料館

1. 全国市場・江戸

江戸幕府成立から約60年を経て、全国的な商品流通のシステムが誕生しました。その中で、当時の畿内先進地帯をひかえた大坂は、商品が集められる市場として位置付けられ、京都は古代以来の手工業都市としての役割を果たしていました。

そして江戸は、消費都市としての役割を担うこととなりました。大坂に集められた商品が南海路（東海道筋の沿岸部）を通過して江戸に送られました。この上方からの商品は「下り荷」といわれ、上等品とされていました。

しかし、やがて江戸の後背地・関東でも商品生産が盛んになり、江戸との結び付きが強まってきました。大小の河川には、河岸地が設けられて荷物を継送りして、江戸まで運ばれました。

2. 江東区の河岸

河岸とは荷物や人を揚げ下ろしする場所で、その場所は指定されていました。

江戸で河岸地が多かった地域とはどんな町だったのでしょうか。

- ① 現中央区の日本橋～永代橋周辺の隅田川にそそぐ堀割
- ② 現中央区の日本橋～八重洲河岸周辺
- ③ 現墨田区・江東区の豎川・小名木川などが隅田川にそそぐ本所深川地域
- ④ 浅草蔵前周辺

以上の4つの地域に河岸が多く設けられていました。1・2は、大問屋が集中する日本橋・京橋を控えていたために多く、4は、幕府米蔵があったこと



「東都永代橋の景」英泉画
深川図書館蔵

隅田川河口付近にあたる永代橋周辺は、江戸の流通拠点となっていました。

によります。

そして、深川地域は3に含まれており、やはり堀割の多い地域でした。

『深川区河岸地免許証台帳』（東京都公文書館蔵）によれば、明治15年（1882）深川区の中には38の河岸地がありました。その用途は、一般の倉庫としての納屋・雑品置場や、「材木の町」深川にふさわしく、材木置場・薪炭置場だった河岸も多く見られました。また、海浜部近くには、網干場や貝売り置場、船具置場といった漁業にかかわる用途も見られます。

河岸地の多い川筋としては、大横川筋・小名木川筋・仙台堀筋・油堀筋・隅田川筋などとなっており、深川の主要な堀割沿いは、その多くが河岸で占められていたといってもいいでしょう。

江東区の河川は、大半が江戸時代に運河として開かれたものです。これは、隅田川対岸に日本橋・京

橋といった江戸商業の中心地があり、江戸湾にも面していたため、物資の倉庫としての役割を初めから担っていたことによります。

ことに明暦の大火（1657年）後の本所深川地域の開発により、両国橋・新大橋・永代橋が隅田川に架けられて、江戸との近接化が図られる一方で、深川地域には多くの堀割が開かれていきました。

3. 深川の間屋群

全国市場・江戸の流通を担った深川には、どんな業種の間屋があったのでしょうか。この表は江戸末期の嘉永4年（1851）にまとめられた『諸問屋名前帳』から、深川の間屋商人が加盟している主な問屋仲間を抜粋したものです。

表 深川の間屋商人

米	下り米問屋 関東米穀三組問屋 地廻り米穀問屋 堅川組八ヶ所組米屋 深川組八ヶ所米屋 舂米屋
飲食品	茶問屋 饅飩 豆腐屋 鮮魚干魚問屋 味噌問屋 地廻り塩問屋
材木	竹木炭薪問屋 炭薪仲買 深川木場材木問屋 板材木問屋熊野問屋組合
油	川辺魚油問屋 下り水油問屋 地廻り水油問屋 水油仲買
肥料	干鰯問屋
染色	藍玉問屋 紺屋
紙	地漉紙仲買 紙煙草入問屋
出版	木版屋 地本双紙問屋
その他	地掛蠟燭組 住吉組荒物問屋 雛屋 鋳物師 神田組芥請負人 深川組芥請負人 廻船問屋

『諸問屋名前帳』より

深川に多かった問屋の傾向がよく分かります。

表に見られるように、米穀・材木・油など、当時の重要な物資を商う多種多様な問屋が、この深川で営業していました。

4. 干鰯と材木

深川の間屋の中で特徴的な業種に、干鰯と材木が

あります。干鰯は、銚子沖で獲れる鰯を油抜きして作られた畑の肥料で、利根川・江戸川から小名木川を経て、深川の集散地に入荷されました。

その集散地は「干鰯場」と呼ばれ、表のように深川に4ヶ所設定されていました。

表 深川の干鰯場

干鰯場の名	場所	現在の住所
銚子場	海辺大工町	白河1丁目
永代場	西永代町	佐賀2丁目
元場	小松町	佐賀1丁目
江川場	和倉町	冬木

富岡八幡宮（富岡1）境内には、かつて江川場に入入りしていた干鰯問屋が信仰していた、永昌五社稲荷が祀られており、灯籠や水盤、狛犬などが往時を偲ばせています。

深川と材木との関わりは、江戸初期にさかのぼることができます。江戸のごく初めには、材木商といえば神田・日本橋辺りに集中し、材木が店の側に高積みされていました。しかし、江戸を襲った寛永18年（1641）の大火後、市中に高積された材木が延焼の原因となったことから、幕府は深川の隅田川沿岸に木置場を設けるよう指示し、深川に最初の木場ができました。

最初に木場が置かれた地域は、江戸湾の河口に近く、やがて流通の拠点へと変貌していきます。縦横に走る堀割など広い敷地を必要とする木置場は、元禄14年（1701）開拓間もない東部の地に移転することとなりました。これが、昭和50年ごろまで続いた深川木場の誕生です。

木場の中心部は碁盤の目状の堀割によって整備され、さらに周辺の仙台堀・大横川をはじめ、今の江東区内の河川には筏が浮かび、「材木の町」を印象付けていました。

江戸末期には、江戸の中心地から本店も深川に移ってくる問屋も見られ、江戸・東京の材木需要を引き受けていました。